

説教「主の^{あわ}憐れみと厳しさ」

創世記 4 章 1～16 節、詩編 103 編

2004.9.12

日本バプテスト同盟

日本バプテスト柏教会

主の^{みな}御名をほめたたえます。今朝^{こんちよう}はお招きをいただき、御言葉^{みことば}を語る機会をお与えくださったことを感謝申し上げます。柏教会の皆さんの上に主の豊かな恵みがありますよう、主イエスの御名により祝福します。

初めに、日本バプテスト神学校の責任者として、日ごろより伝道者養成のためにお祈りと御支援を頂いていますことを感謝いたします。今後ともよろしく願ひいたします。

今朝は、創世記 4 章のカインとアベルの物語を取り上げました。兄弟殺しの話か、と反発を感じるお方もあるかと思いますが、少し我慢をしてお聞きいただきたいと思います。

創世記の 3 章で、アダムとエバが神の戒めを破って、エデンの園を追放されます。そして、地上の生活が始まり、二人の息子・カインとアベルが生まれました。カインは農耕生活を始め、他方、アベルは羊を飼う遊牧生活を営んでいました。そして、時期が来て、それぞれ 主に^{ささ}^{もの}献げ物をしたのでした。カインは土からの生産物を^{ささ}献げ、アベルは羊を献げました。

なぜ、神に^{ささ}^{もの}献げ物をしたのでしょうか。エデンの園にあったときは神と共にいたので、物を神に^{ささ}献げる必要はありませんでした。しかし、地上に追放されてからは、神との交わりが断たれた。そこで、神との交わりを保つために、神に^{ささ}献げ物をし、礼拝をしたのです。働いて得たものを神に^{ささ}献げたのであります。

ところが、ここで問題が起きました。主は弟アベルの犠牲には目を^と留められたが、カインの^{ささ}献げた土地の産物には目を留められなかったからです。そこで、カインは大変怒った、と書いてあります。

ここで、この物語を読む人は誰しも、「どうしてだろう？ 一方の^{ささ}^{もの}献げ物を受け入れ、他方の^{ささ}献げ

物を顧みなかった神は不公平ではないか。この違いは何だろうか」と、いろいろ考えます。

ある人は、カインの^{きさきもの}献げ物は農耕文化を代表し、他方 アベルのそれは遊牧文化を表わしている、と見ます。そして、その後の歴史で、イスラエルは農耕文化に生きていた。そんななか、カナンの生活の悪い影響であるバアル宗教に毒された苦い経験から、主は土地の産物を喜ばれなかったのだろう、と考えます。他方、遊牧生活は族長時代（アブラハム以来）やモーセの時代の生活様式であったから、主はこれに好意を示されたのだろう、と言うのです。これは文化的説明です。

またある人は、カインが^{きさきもの}献げた物はあまり良い物ではなく、^い好い^{かげん}加減な物を^{ういご}献げたにちがいない、と考えます。他方、アベルはどうかというと、4章4節に「羊の群れの中から肥えた初子を」^{ういご}献げたとあります。立派な良い物を^{ういご}献げた。そこに違いがあった、と説明します。ただ、私としては、カインの^{きさきもの}献げ物が良くなかったと決めつけ、カインを悪者に仕立てるのはちょっとカインが^{かわい}可哀そうな気がします。

では、どう解釈したらよいか。^{きさきもの}献げ物の規定に関してはレビ記で詳しく定められていますが、私はそこにヒントがあると思います。レビ記冒頭の1章の初めに、牛を焼き尽くして^{きさき}献げるとき、無傷の^{おす}雄を^{きさき}献げる奉納者は主に受け入れられるようにそれを引いて行きなさい、とあります（レビ記1:3）。主に受け入れられるようにとはここでは傷のない良い物をとという意味ですが、「主に受け入れられるよう」という言葉が示すように、その^{きさきもの}献げ物を受け入れるか受け入れないかは主御自身のお考えによるのです。主の^{みこころ}御心しだいである、ということです。神様への^{きさきもの}献げ物は、^{きさきもの}献げさえすれば神は喜ぶ、いや喜ぶはずだと、そんなふうには考えてはならない。それは、人間の勝手な考えです。

では、このカインのように、^{きさき}献げた物を神が受け入れてくれなかったら、どうしたらよいでしょうか。私はむしろ、その後のことが大切だと考えます。カインは本日の箇所（創世記4:5）に記されているように、神は弟の物は喜んで受けたのにこの俺の^{きさきもの}献げた物は喜ばないとはけしからんと「^{おこ}激しく怒って顔を伏せた」、つまり、神に顔を向けず、^い横を向くか^{いか}下を向いて、顔を怒りでいっぱいにしたのでした。

そのとき、カインのやり場のない^{いか}怒りを^{しず}鎮めるように、主が警告します。罪が戸口に待ち伏せしているぞ、怒りを収めるようにしなさい、と。ここで、「罪」という言葉が初めて出てきます。

他人と比べて差をつけられるとき、人は屈辱を感じ、時として怒りを抱きます。ここで大切なことは、カインが^{おこ}怒って顔を伏せたということです。これは、他者との関わりを断つことを意味します。ここでカインがなすべきことは、率直に不満を口に出し、「神様なぜ、私の^{きさきもの}献げ物を気に入ってくれなかったのですか」と、その理由を問うことでした。そうすることが必要だったのでした。

レビ記19章17節に「心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい」とありますが、これは、ある人からひどいことをされたとき その相手を心の中で憎んではいけない、そうしな

いで・・・ということです。つまり、あいつはこんなことを俺にした、と心の中に怒りを溜め込んで
 ではない。そうしないで、その相手に率直に「あなたは どうしてそんなことをするのですか」と
 問い、その人を戒めるようにしなさい、と教えているわけです。しかし実は、これは難しいことす
 ね。

私なんかも そんなとき、心の中に恨みを密かに溜め込んで、あいつにいつか神の罰が下るといい、
 不幸が起こったらいい、などと黙り込みかねません。しかし、続く 18 節に進むと、隣人を自分自身
 のように愛しなさい、という戒めに繋がっています。恨みを溜め込まないで、相手に率直に「なぜ、
 そんなことをしたのか。止めてほしい」といった言葉を言うということは、隣人への愛がなければで
 きないことです。そうしなさい、と教えているのです。そう言わないで 恨みを心に留め置くことは、
 その人への愛が足りない、と。

が、カインは怒りのあまり 神の警告を拒絶し、弟アベルを野に誘って、誰も見ていない所で弟を
 打ち殺してしまいます。怒りのはげ口を、何の罪もない弟に爆発させてしまうのです。

今日の世界の大問題である、強大な軍事力とテロによるこれへの応酬。罪のない多くの人が殺害
 されています。個人的にも、一人の高校生が昔いじめを受けた人に復讐しようとその人の家に行っ
 たら、留守でいなかった。そして、そのとき出てきたその人のお母さんを殺害したのです。これ
 に似たことが頻々と起きています。カインの殺害は大昔の話ではありません。

さて、話を進めます。9 節、主はカインに言われました。「お前の弟アベルは、どこにいるのか」。
 カインは弟を殺したことなど 誰も見ておらず、誰も知らないと思っていますから、平気な顔で「知
 りませんよ、弟の番人じゃあるまいし」と答えます。この「弟の番人」というのは、弟アベルは羊を
 飼い、常に羊の番人をしていたわけですから、「その弟を羊のように、その番を私がするのですか。
 そんな必要はないでしょう」と、皮肉たっぷりにふてぶてしく返した言葉と言えます。カインはこの
 ように、主は何も知らないと思って、「私が弟のことなんか知るはずがないでしょう」と空惚け、弟
 を殺しておいて、それなのに「何の関わりもない」と答えたのです。

しかし、主は御存じでした。10 節で、主は言われます。「お前は何ということをしたのか。とんで
 もないことをしてかしたものだ。お前の弟の血が土の中から叫んでいるぞ」。血は命であり、その命
 の根源的な持ち主は主であります。アベルは不当に殺されました。ですから、「血が叫ぶ」というこ
 とは、不当に流されたその血が生命の源である主に訴えるのです。これで、カインの弟殺しがばれて
 しまいました。

農耕生活を生きてきたカインにとって、弟の殺害の罪は二つの罰を受けることになりました。

一つは 11 節、12 節に言われているように、不法な殺害で罪のない者の血が流され、カインのた

めにそれまで作物を産出してきた大地がその不法の血を飲まされた。そこで、土はカインにとって呪われたものとなり、土はカインのために一切 作物を産み出すことを止めたというのです。その結果は明らかで、農耕生活をして生きてきたカインは、生活が成り立たなくなりました。食べ物がなくなり、飢えて死ぬほかありません。仕方がないので、その土地を離れ、食べ物を求めてさまよい歩く放浪者となるほかありません。これが一つ目の罰です。

カインのもう一つの罪の結果は、14節のカイン自身の言葉の中で言われています。「誰かが私を見つけたら、私を殺すでしょう」と。これは、罪のない人を殺せば、その罪の償いは当の殺害した者の血が流されるほか 償いようがない、という^{おきて}掟から来ています。「人の血を流す者は、人によって自分の血を流される」(創世記 9:6) のですから、カインを見つけた人はカインを殺すことができる。いや、殺さねばならないのです。

カインは、一時の^{いか}怒りに任せてとはいえ、取り返しのつかないことをやってしまったわけです。13節、カインは主に申します。「わたしの罪は重すぎて負いきれません」。どんなに努力しても償い切れない罪を犯してしまいました、と自分の罪を認め、告白しています。その当然の罰として、その土地から追放され、さまよって歩くほかない。そして、どこかで獲物でも探して生きていかねばならない。しかも、それでもなお終わらず、誰かに見つかって^{ふくしゅう}復讐されるか殺されるという悲惨な罪の報いの^{うめ}恐ろしさを呻くような声で主に語っています。

しかしながら、このカインの告白を聞かれたときの主の答えが 実は、カインとアベルのこの物語のクライマックスであるのです。ただ ここで、15節の主の言葉について違った読み方があるので、そのことを申し上げなければなりません。カインの^{うめ}呻きに対する主の答えの冒頭ですが、新共同訳をはじめ最近の訳は、「それゆえ」とか「それだから」という意味に原文を読んでいます。ヘブライ語で「ローヘーン」とする読み方です。ところが、ヘブライ語の本文をギリシア語やラテン語、シリア語に訳したものが古くからあり、それらでは、これが「いや、そうではない」という読みになっています。邦訳でも、文語訳や口語訳の聖書ではそうになっています。元のヘブライ語をおそらく「ローヘーン」と読んだものと思われま。

私はここでは、後者の読みを取りたいと思います。するとどう解釈になるかと言いますと、今申しましたように、カインは^{おのれ}己の重大な罪の重さに^{おのの}慄き、「ああ、自分の生きる道はもう失われた。今や餓死するか、それとも^{ふくしゅう}復讐を受けて殺されるか」と、死の恐怖に閉じ込められ、絶望の淵に立たされてしまった。が、「もう駄目だ」とカインがそういった絶望の叫びを発したとき、主はそのカインに何と言われたか。「いや、そうではない(ローヘーン)」、つまり「そのようにはさせないよ」とそう言って、カインの絶望の叫びを打ち消してくれたのです。「死ぬことはないよ。誰も、カイン、お前を撃ち殺したりしないように、お前にしるしを付けてやろう。そのしるしを見れば、^{へた}下手にカインに手出しはすまい。手出しをしようものなら、7倍もの^{ふくしゅう}復讐を受ける」と。つまり、誰も7倍の復讐を恐れてカインを殺したりしないようにしてあげる、と言ってくださったのでした。人殺しの

カインにとって、この主の言葉はなんと憐れみに満ちたお言葉だったのでしょうか。このような意味合いを示されたとき、私は感動をおぼえました。これを知るまで、私はこの兄弟殺しの話を取り上げられず、避けて飛ばしていたのです。

パウロは、コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節で次のように言っております。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていただきます」。このように、カインが己の罪の重大さに気づき、罪を認めて「死ぬほかない」と叫んだとき、主はそのカインに対して「いや、そうではないよ。絶望することはないよ」と言われ、カインにしるしを付けてその命を守り、カインに生きる道、死を免れる道を開いてくださったのであります。

人殺しをしたカインがその罪を告白したとき、死ぬべき彼の運命を 主は無限の憐れみによって顧み、カインに生きる道を開いてくださいました。ここにすでに、福音が鳴り響いております。主はたしかに、カインに対して「その罪を赦した」とは言っておりません。しかし、生きる道を開いてくださったのです。

こうして、カインはさまよい歩く者として、主の前を去っていきます。そして、それはまた、そこには厳しい神の措置が見られるということでもあります。

実際、パウロはローマの信徒への手紙 11 章 22 節で「神の慈しみと厳しさを考えなさい」と述べています。口語訳では「神の慈愛と峻厳とを見よ」となっていますが、これは旧約聖書を一貫している主の御心でもあります。そうしたなか、詩編 103 編 8 節に詠われているように、「主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい」のです。

人の思いをはるかに超えた主の愛と憐れみとが示されたのでした。

最後に、イエス様が十字架につけられ、また二人の強盗がその右と左に磔にされたとき（ルカ 23：39～43）、犯罪人の一人がイエス様を罵るもう一人の強盗をたしなめて、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」（42）と言った場面を思い起こしたいと思います。これに対し、イエス様は「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」（43）、パラダイスにいると言明されました。まことに、神の憐れみと厳しさが歴史を通じ、ついに十字架において示されました。つまり、イエス様の肩にすべての罪を負わせ、これを死なしめることによって、罪への神の厳しさと同時にその赦しの道を開いてくださったのでした。イエス様に身も心もすべて委ねて従うとき、主は今も救いの道を開いてくださっています。

父なる神は己の御子イエスにおいて厳しく罪を罰し、御子のその十字架の死を仰ぎ見るすべての者に救いの道を開いてくださいました。この主の憐れみと厳しさのもと、共々、信仰の歩みを喜ん

で力強く進めてまいりましょう。